

Title	マシューズ著 景気循環
Sub Title	R.C.O. Matthews, Trade cycle
Author	大熊, 一郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1960
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.7 (1960. 7) ,p.667(93)-
JaLC DOI	10.14991/001.19600701-0082
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19600701-0082

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

われるので、本書の態度は買うべきである。ただ、経済計画の把握の仕方や型の定義には異論がでるかも知れない。第三章と第四章とを比較して、前者がいささか網羅的に分析され後者がかなり技術的学説的にしぼられていることも、執筆者の相違に加えて、計画の異質性に基つたためであろう。これと関連して、ソ連と英国の社会主義が直面したそれぞれの経済の構造的特質が、計画の採用にどのよ

うに影響したかをさらに検討する必要もあろう。それはともかく、いわば、本書は、社会化経済計画への序説ともみられるものであり、たんなる概説書に止まるものでないから、社会化経済計画に関する著者達の今後の理論的發展に大きな期待がもたれる。(理想社刊・A5・二九六頁・四五〇円)

(原 豊)

新刊紹介

マシューズ著
『景気循環』

R.C.O. Matthews, Trade Cycle.
Cambridge University Press, 1959.
(The Cambridge Economic Hand-
books.) 12 s. 6d.

ケムブリッジ経済学入門叢書は最初の監修者ケインズをもつて始まり、すでに二十冊に近い、いずれも名著として知られた書物を世に送っている。なかでもハロッドの国際経済学、ロバートソンの貨幣、ドップの貨幣、ヒックス女史の財政等はあまりに有名である(いずれも翻訳あり)。

マシューズの「景気循環」も名著ぞろいのこの叢書にさらに光彩をそえるに値いするものである。

本書の内容を章別にみると次のとおりである。一、序説 二、循環のモデル 三、投資(+) 加速度原理の一般化 四、投資(+)設備更

新刊紹介

新、技術進歩その他の影響 五、在庫投資 六、住宅投資 七、消費 八、貨幣と金融 九、景気为天井 一〇、景気の恢復 一一、国際的景気波及 一二、周期と大循環・小循環 一三、成長と循環 一四、景気統制政策。景気循環についての理論と経験法則がすべて含まれていることは、この章立てをみてもわかる。

れわれに具体的現象をいかに解釈するかの有力な手がかりを与えてくれるものであり、こんどの景気循環論の適切な出発点を示してくれるものである。

—大熊 一郎—

景気循環論の歴史はきわめて古く、太陽黒点説をも含め幾多の学説が提出され、一方

国際経済学会編
『論争・国際価値論』

で統計的記述の発達とともに、他方に理論的モデルの彫琢が加えられつつあるが、今日では乗数—加速度の累積作用がもたらす有効需要の変動がひとつの有力な理論として、ケインズ以後の経済学を支配している。本書もまた基本的にはこの線を外していない。しかし、景気循環という、あらゆる経済活動の錯綜した交互作用から生みだされた経済の動態については、単なる既成のモデルを超えて、もっと企業者の行動、消費者の行動、金融、財政政策等について細密な検討を行ない、そこから新たな理論的統一がはからねばならない。現状は既成のモデルで説明しえない部分の方が多いため、その意味で本書はわ

「国際価値論争」とは、「国際間の交換価値決定の理論に関する論争一般を指すのではなく、マルクスの国際価値論についての諸命題の理解をめぐる論争」で、第二次大戦後の日本の国際経済学界において、広汎に学者を動員して行なわれた一連のものである。論争の端緒となった研究は戦前にまでさかのぼることができ、実際に論争が活発に展開されたのは、一九五〇年に創立された国際経済学会の舞台を中心とする。国際経済学会が一九五九年秋の総会で、従来の論争を改めて一冊の本に編集することを企画したのもこのような事情による。そして編集の責任には、自ら積極的に論争に参加されるとともに、論争

九三 (六六七)